

大江戸喰種：隻眼の甘党

Mr Muu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは江戸、かぶき町。

天人の襲来から20年後、現在幕府はヒトを喰らう怪人“喰種”による危機に直面していた。

しかし、こんな激動の時代に逆らいながら生きる一匹狼のサムライがいた。
例えばこの男。

権威を嫌い、群れを嫌い、束縛を嫌う。鋼の魂と叩き上げの剣術だけを武器に闘う。

その名は『万事屋銀ちゃん』社長 坂田 銀時。

又の名を“白夜叉”

目次

第一訓 大人でも知らない人について 行ったらダメ	1
-----------------------------	---

第一訓 大人でも知らない人について行ったらダメ

ここは江戸、かぶき町。

天人の襲来から20年後、現在幕府はヒトを喰らう怪人“喰種”による危機に直面していた。

しかし、こんな激動の時代に逆らいながら生きる一匹狼のサムライがいた。
例えばこの男。

権威を嫌い、群れを嫌い、束縛を嫌う。鋼の魂と叩き上げの剣術だけを武器に闘う。
その名は『万事屋銀ちゃん』社長 坂田 銀時。

又の名を“白夜叉”

「ちよつと待てえいいいい!!?」

威勢のいいツツコミがキメ顔の銀時に炸裂する。

「あんたSS小説だからって何かツツつけてんの!?」

「そうアル、この超絶美少女神楽ちゃんを忘れてるアル」

「朝っぱらからうるせくな せっかく作者がいい感じにナレーションしてくれてたのに

「よ」

「作者とか言わないでくれます!?」

「一回やって見たかったんだよ、ド○ターX的な入り方カツケエだろ?」

「どこがド○ターXなんだよ!!?」

「それよりも今朝のニュース見ましたか? また喰種が出たらしいですよ」

「喰種? こんな漫画の世界の話だろ、どうせ寝ぼけた人が見間違えただけだつて」

そう言い、銀時達は新八をよそ目に朝食を取り始める。

「喰種ならこんなガツガツメシも食べねえんだろ? 可哀想な話だぜ」

銀時は茶碗一杯によそられた白米をガツガツとかき込む。

「ゴボロロビツシャアアアア!!?!!?」

銀時の口から大量の吐瀉物が吹き出る。

「な……なんだこれ、クソマジいぞ」

「そんな事ないアル、ほらこんなにおいし……」

「ゴボロロビツシャアアア!!?!!?」

神楽も銀時と同じ反応を見せる。

「だ……大丈夫ですか!?」

新八は二人を介抱しようと近づくとある異変に気付いた。

二人の片目が赫く染まっていた。

「っ!!?」 その眼、どうしたんですか!?!?」

新八はこの眼に見覚えがあつた。

それは喰種が持つと言われる「赫い眼」**「赫眼」**である。

しかし新八は疑問に思う。何故銀時が喰種の身体を持っているのかという事だ。

銀時は大の甘党である。現に新八は銀時が甘味を大量摂取しているのを何度も見ていた。

「これか? 何故こんな体になったのかには深い理由があるんだよ」

そう言つて銀時は回想に入る。

「あれは昨日のことだった」

「酔い冷ましに外をふらついているとナイスバディな美女が声かけて来てよ……………」

*

「あのくすいません」

銀時にメガネを掛けた女性が話しかける。

「なんスか?」

「坂田 銀時さんですか?……………少しお話宜しいですか?」

すると銀時は満更でもないという様子で女の肩に手を回す。

「やっぱ見る目のある女は違えますね。この俺のフェロモンを嗅ぎ取っちゃあく仕方ない」

「ちよつ……やめて下さい！」

女のビンタが銀時の顔に痛々しい痕をつける。

「わたし、神代 リゼって言います」

「ちよつとした依頼を……」

「ほう、どんな依頼だい？」

「最近喰種の事件が起こった場所の近くに住んでいて、怖くて夜も寝付けないんです」
「だから家まで送ってもらえませんか？ お金ならいくらでも出します」

銀時はふうんと頷き

「お代は結構。こんなべっぴんさんほつとくわけにはいけねえからな」

と、かすかなピンク色の期待を持ち依頼を承った。

その後、銀時とリゼはガランとしたかぶき町を歩く。

「この路地裏を抜けたらわたしの家です」

そして路地裏に入ったところでリゼが急に銀時の胸にもたれ掛かる。

「わたし、ずつと貴方を見ていたの」

「え、ちよつとここでは……続きは向こうのホテルで……」

「もう我慢できない、だって………こんなに美味しそうなんだもの!!?」
リゼが銀時の肩にかぶりつく。

「ツ!!?..!!?」

「ねえ、坂田さん わたしがいくちばん好きなことが何かわかります?」

「逃げ惑うヒトの臍物をぜくくんぶ引き出しちやう事なの……ゾクゾクしちやう」

「だから坂田さん、感じさせて」

「うわああああああ!!?..!!?」

銀時はとてつもない形相でリゼから逃げる。

しかしリゼの赫子が彼の横腹をえぐる。

「あら……もう終わり?」

ぐったりとして動かない銀時にリゼが歩いていく。

「坂田さんは筋肉質で固そうだけどその分旨味が詰まってそうだわあ」

リゼが赫子を銀時に伸ばした時、

「……………あら?」

『ドゴゴゴ』

大量の鉄骨がリゼの上に落ちて来た。

「なんで……あ…………たツ…………が…………」

*

「で…なんやかんやあつて今に至る」

「おいしいい!!?!!? 何カネキくんの未来変えちやつてんの!!?!!?」

「このままだとあんたペンチで指振じ切られたり耳にムカデを入られたりしますよ!!
?」

「新八、大丈夫アル、髪はもともとこんな色だから白になつても大差ないネ」

「よし新八、今から喰種がやつてそうな喫茶店探してこい」

「ちよつと待つて下さい、神楽ちゃんが喰種化した原因がまだ……」

「大した事じゃないネ、鉄骨落下現場に赤いタコ足が散らばつてたから食つただけアル」

「それ多分リゼさんの赫子!!?!!?」

「どうりでマズかつたわけアル」

「二人とも食事はどうするんですか?」

「そんなのどうにかなるだろ」

*

数時間後万事屋一行は喫茶店探しをしていた。

「銀さん、喰種がしてる喫茶店なんて見つかるわけないですよ」

「うるせくなつてこべ言わず探せ！もしかしたら肉を提供してくれるかもしれないねえだろ」

「銀ちやくんこことか怪しいアルよ」

神楽の指差す先には「あんていく」と書かれた看板があつた。

くカランカランカラン

銀時達は店の扉を開ける。

「いらつしやい」

そこには顔に深いシワが刻まれた老人がカツプを吹いていた。

「君たちはどつちかな？」

「どつち？てどういう意味ですか？」

「君たち恐らく喰種だろ？」

銀時達はハツとする。

ついに希の喫茶店を見つけたからだ。

「ジイさん、聞きてえことがあるんだが人が喰種に変わつちまうてことはあるのかい？」

「実はこの二人はとあることが原因で喰種の身体になつてしまつたんです」

新八が銀時の言葉に補足を加える。

「前例がないからなんとも言えないがもし、喰種の身体の一部が体内にあるなら可能性

はあるかもね」

「ちよつと話したいことがある 奥に来てくれ」

銀時達はそう言われるがまま奥の部屋に案内された。

「キミたちは喰種についてどれくらい知っているかな」

3人は喰種についてや食料を提供してくれることなど銀時達がこの身体でも生きていけるような知恵を教えられた。

「でも人肉を食べるのは気が進まねえな」

「しかし、飢えには耐えられないだろう?」

そう言い芳村は小包を銀時の前に差し出す。

「これってもしかして……」

「ああ、新八くんの思う通り人肉だ」

「銀ちゃん、コレ超美味いアル、店長くおかわり」

「この小娘躊躇いなく食いやがった……」

新八は呆れてお得意のツツコミも出ない。

「ホントだ超美味いぞ、コレ」

「きみの仲間変わってるね」

予想していた反応と違うのか芳村も少し驚いているようだ。

その後、銀時は数日分の食料を買い、店を後にした。

「新八！神楽！今から作戦会議だ！！？」

銀時の声が家中に響いた。